

季刊誌

正覚寺便り

いのちに合掌 日蓮宗
法華山
正覚寺

令和8年9月1日

秋 第12号

〒409-3865
山梨県中巨摩郡昭和町
西条新田832

電話 (055) 275-3283
FAX (055) 275-3283
Eメール: info@shogakuji.me



法華山 正覚寺
公式サイト

<https://shogakuji.me/>



お寺のお知らせ随時更新中!!



お寺の公式SNS
Instagram



KUNUGI.SHOGAKUJI
正覚寺の日常や行事を
日々更新しています!

変わるお寺、変わらないお寺 住職 功刀 久士

暑さの厳しかった夏も少しずつ過ぎ、夕には秋の気配を感じる頃となりました。

この夏も正覚寺では、八月一日の一斉墓参、八月十六日の施餓鬼法要をはじめ、多くの皆さまにお参りいただきました。境内に多くの人が集まり、久しぶりに顔を合わせた方々が言葉を交わし、そこに子どもたちの元気な声が響く。そんな光景を眺めながら、今年も無事にお盆を迎えられたことをありがたく感じています。

さて、最近私は、「お寺は、どこまで変わってよいのだろう。」そんなことを考えることがあります。正覚寺も、この数年でずいぶん姿を変えてきました。墓地を整備し、新しい供養の形を取り入れ、境内を整え、地域の方々や子どもたちにもお寺へ足を運んでもらえるような取り組みを少しずつ増やしてきました。

今年は新たに、家族の一員として共に暮らし動物たちを供養する、個別・合同ペット供養墓地「想」も整備しました。住職になった頃と比べれば、正覚寺の景色も、お寺で行っていることも、少しずつ変わっています。

「これは、本当にお寺がすることなのだろうか。」昔のお寺にはなかったものを取り入れることが、寺院として本当に正しいことなのか。という理由だけで何も変えないことが、本当に伝統を守ることなのか。

これは、簡単には答えの出ない問いです。しかし、私たちの暮らしを見渡してみれば、社会そのものが大きく変わっていることに気づきます。かつては同じ地域に何世代も家族が暮らし、お墓は子へ、孫へと受け継がれていくことが当たり前でした。今では、子どもたちが故郷を離れて生活することも珍しくありません。家族の形も変わり、「自分たちのお墓を将来誰が守ってくれるのだろう」と心配される方も増えていきます。葬儀の形も変わります。

した。地域との付き合い方も変わりました。そして、お寺との関わり方も変わらなくなりました。

そのような時代の中で、お寺だけが五十年前、百年前とまったく同じ姿であり続けることが、果たして「伝統を守る」ということなのでしょうか。

日蓮聖人は『教機時国抄』の中で、「仏教を弘めん人は必ず時を知るべし」と説かれています。そして、そのことを農作業に譬えられていきます。

同じ種を持ち、同じ土地を耕し、同じように人が力を尽くしても、種を蒔く「時」を誤れば実りにはつながらない。反対に、その時にならなれば耕作すれば、それぞれに実りを得ることができません。

日蓮聖人はその譬えをもとに、仏法においても「時を知る」ことが大切であると示されました。もちろん、これは単に「時代に合わせればよい」という意味ではありません。何を伝えるのかという根本を見失わず、同時に、今を生きている人に、その教えをどのように届けるのかを考える。

私はこの御文から、その大切さを改めて感じています。日蓮聖人が生きられた鎌倉時代と、私たちが生きる令和の時代とは、社会も生活も大きく違います。しかし、人間そのものはどうでしょう。大切な人を失えば悲しい。家族には幸せでいてほしい。自分が亡くなった後のことを心配する。苦しい時には誰かに支えてほしい。そして時には、「自分は何のために生きてきたのか」と考える。時代がどれほど変わっても、人間が心の奥に抱えるものは、それほど変わっていないように思います。

だからお寺には、「変わらなければならないもの」と「変えてはいけないもの」の両方があるのだと思っています。

建物の使い方は変わってもよい。お墓の形も変わってもよい。人が集まる方法も、情報を伝える方法も、時代に合わせ変わってよい。新しいことにも挑戦してよい。しかし、人の悲しみに寄り添うこと。亡き人を大切に供養すること。手を合わせる場所を守ること。仏さまの教えを伝えること。そして、人と人とのご縁を結んでいくこと。

これらは、お寺がどれほど姿を変えても、失ってはいけないものだと思います。むしろ私は、変えてはいけないものを守るためにこそ、変わらなければならないことがある。そう考えるようになりました。例えば、正覚寺が永代供養のお墓を整備してきたのも、その一つです。

「お墓を守ってくれる人がいないから、お墓を持つことができない。」そんな悩みを抱える方がいるのであれば、これからの時代に合った供養の形をお寺が考えていく必要があります。

今年、ペット供養墓地「想」を整備したことも同じです。昔と比べ、犬や猫などの動物たちは、単に「飼う」という存在ではなく、家族の一員として共に人生を過ごす存在となっています。その大切な家族との別れに悲しむ方に対して、お寺だからこそできることがあるのではないかと。

そんな思いから始まったのです。また、一斉墓参の日子どもたちがお寺のお手伝いをしてくれたり、境内に多くの人が集まる催しを行ったことにも、私なりの思いがあります。

「お寺とは、葬儀や法事の時だけ行く場所」ではなく、普段から人が訪れ、人と人が顔を合わせ、子どもたちにとっても身近な場所であってほしい。そして、その中で自然と仏さまに手を合わせる姿を目にしてほしい。

そう願っています。ただし、新しいことを始めれば、それがすべて正しいというわけでもありません。時代に合わせることは考えれば、お寺が単なる便利な施設やサービスになっってしまうかもしれません。だからこそ、新しいことを始める時ほど、自分自身に問い続けなければならないと思っています。

これは本当に必要なことなのか。これは仏教寺院としてすべきことなのか。正覚寺が大切にしてきたものを失ってはいないか。変わることを恐れないこと、何でも変えてしまうことは、まったく違わない。

秋になると、木々の葉は色づき、やがて落ちていきます。けれども、木そのものがなくなるわけではありません。葉を落とし、冬を越し、春になればまた新しい芽を出す。毎年その姿を変えながら、それでも一本の木として生き続けています。

お寺も、少し似ているのかもしれない。時代とともに、枝葉は変わっていく。けれども、その「根」まで変えてしまったりはしていない。



地元元スポ少の教え子たち。毎年必ずお墓の掃除を手伝いにお寺に大集合。